

読花

北海道警察には「刑事の誓い」と題する言葉があると、2年前まで道警の刑事部長を務めた中川正浩さんが警察関係の月刊誌に書いていた。以下の7項目からなる誓いだ◆▽社会正義のために、これがわれわれの使命である▽打てばひびく、これがわれわれの感覚である▽腰軽く粘り強い、これがわれわれの根性である▽心と心の触れ合い、これがわれわれの誠意である◆▽物からものを聞く、これがわれわれの科学である▽話し上手より聞き上手、これがわれわれの技術である▽どんな役にも誇りを、これがわれわれの組織である――。1969年に作られたというが、内容はまったく古びていない◆当時、幹部の間で刑事のサラリーマン化やマイホーム型志向が問題になり、「ひとつ刑事の理想像をえがき、一線刑事の指針にしよう」となったのだという。刑事だけではない。この誓いは、どんな職業にも通用しそうだ◆ただ、中川さんは「業務負担が過重で、育成に注ぐ余力も時間も無い」という悲鳴「が聞こえたため、仕事の合理化、効率化も試みたという。確かに余計な雑務に追われているようでは、7

項目の内容を実践しようという気力も起きない◆入社式のトップ訓示でも理想の社員像が語られることが多いが、業務内容や職場の環境にも気を配ってこそ、説得力がある。